

# 保育者を目指す学生が集団活動指導時に感じる困難さに関する研究 — ナラティブ・アプローチによる分析 —

佐藤 智恵 森本 玲子

Study on difficulty that a student feels at the time of collective guidance :

Analysis of narrative approach

Chie SATO Reiko MORIMOTO

## 要 旨

本研究では、保育を学ぶ学生が抱える集団指導場面における指導の困難さについて、ナラティブ・アプローチを用いて描き出すことを目的とし研究を行った。分析の結果、学生たちは子どもの発達が見えられていないことから生起する困難さ、活動の流れに注目するあまり、子どもの気持ちに共感を示したり、子どもとの往還的なやり取りを行うことが困難であることが描き出された。ところが指導2回目に、突然に内容の変更をせざるをえない場面になると、学生から子どもに対する一方的な指導ではなく、子どもと学生らの間で双方向的なやり取りが生起していたことが考えられた。「あらかじめ決まった内容をやる」のではなく、子どもの様子に添って必要な活動を行う重要性を感じられた時、その子どもの見方というものが、1度目とは変化したことが考えられる。

キーワード：保育を学ぶ学生 集団活動指導 ナラティブ

## 問題と目的

保育所や幼稚園で働く保育者を志す学生は、将来、保育者としてよい保育実践を行うために様々な力を備える必要がある。例えば、荒井ら(2012)は、運動指導を例に挙げ、よりいきいきとした言葉による実践的な指導を行うために、運動の構造を理解し、動き方のコツを認識することの必要性を述べている。また、鈴木ら(2013)は、子どもの実態を知り、援助の在り方を学ぶという重要な事項に繋がることとして、保育を学ぶ学生が実習のねらいを意識することを挙げた。小島(2012)は、「実践力のある保育者」の基礎作りが養成校の重要な責務であることを述べている。他にも製作、音楽、表現などの保育内容に関する技術の獲

得は言うまでもなく、子どもの保護者支援、気になる子どもへの対応など、保育を学ぶ学生には、保育者の多様な職務内容と同様の幅広い様々な知識やスキルの習得が求められている。

そのような中、保育者を志す学生たちは保育実習や幼稚園教育実習での学びの機会を持っている。実習は、大学での理論的な学習と併せ、実際の子どもの姿や保育方法などを学ぶ機会である。一方で学生たちは、責任実習や設定保育などと呼ばれる集団活動指導の場面に困難を感じることもある(高月ら、2007)。

現在、保育所は保育士不足という困難に直面している。厚生労働省が2011年に実施した調査によると、調査に参加した公私立保育所のうち74.5%

が保育士の採用に困難を感じると回答している。また、それは一時的なものでなく「長期的な課題」であるという。保育士養成施設の卒業生を対象とした卒後の動向について、全国保育士養成協議会が2009年に全国規模の調査を実施しているが、それによると、約6500人の調査対象者のうち一度も保育の職場を経験していないものが27.6%も存在している。

保育者という職業を選択しないということについては、実習の経験から自らの適正に疑問を持つ学生がいる（吉田・田島：2010）ことは明らかにされている。具体的なものとしては、例えば、斉藤ら（2012）は、集団活動の指導において学生らが「幼児への対応」や「活動への展開」などについて困難を感じていることを報告している。もちろん、山田（2012）の報告のように学生たちにとって、実習での集団活動の指導は、様々な保育実践力を身につけることができる大きな学びの機会であることは言うまでもない。しかし、その個人の性格などによって、苦手さや不安、困難さを感じるということへの想像は容易である。学生が集団活動の指導場面において、どのような事に不安を感じ、困難を覚えているのかを明らかにすることは、保育者養成の指導上示唆を与えるものになるだろう。

このような現状を明らかにするために、本研究ではナラティブ・アプローチを用いる。それは、集団活動指導場面には、学生それぞれが感じる困難さが存在すると思われ、それは、個人のこれまでの経験と深く関係することであるからだ。

個人的な経験は、それぞれのナラティブから描き出すことが可能である。二宮（2010）は、ナラティブ・アプローチの使用について、これまでの研究が個人の経験を扱っていても、研究プロセスのなかで、個人の経験にまつわる固有の意味は削ぎ落とさざるを得なかったことを指摘し、教育に関する研究においては、世界中でたった一人しかない個人の行為にまつわる意味こそ、中心に据えるべきだと述べている。

今回、学生の集団活動指導における学生の心情

を明らかにする際に、保育実習における実践ではなく、障害児の親子を対象とした年次大会の託児における集団活動指導場面を対象とする。それは、保育実習の責任実習の場面では、学生は常に評価される立場であるために、極度の緊張を強いられていると考えられる。そして、そのことがより指導を困難にしていることが推測される。今回は、評価という要因を除き、集団指導ということのみの困難さに焦点を当てることができるような場面を対象とする。

そこで本研究では、障害児に対する集団活動指導場面における指導の困難さについて、3名の学生の語りに注目し、保育を学ぶ途中にある学生が、どのような事に困難を感じているのかということについて、ナラティブ・アプローチを用いて分析を行うことを目的とする。

## 方法

### (1) 調査協力者

調査協力者は、障害児の集団活動指導を行った学生4名のうち3名である。学生は3名とも保育士課程で学んでいる3年次の学生である。学生らは2年次に保育所と福祉施設でそれぞれ2週間の保育実習（保育実習Ⅰ）を経験している。今回の調査は、匿名での調査であること、参加は任意であることを説明し依頼した。また、文章化したデータを協力者それぞれに提示し、確認してもらい掲載の許可を得ている。

### (2) 聞き取り

聞き取りは、20XX年12月、それぞれ1名ずつに対して40分～60分間程度、筆者の研究室などにおいて行った。それぞれに対して、「練習の際のこと」、「当日のこと」、「これまでの経験」の3点について話してほしい事を伝え、自由に語ってもらった。言葉に詰まったり長く沈黙している時なるべく待つようにしたが、どう語ればいいのか不明に感じたり、困難を感じていると判断した場合には、筆者が質問を行うようにし、語りを引き出した。語りは、それぞれの了解を得てICレコーダーに採録し、終了後すぐに逐語録を作成した。

### (3) 分析方法

分析は逐語録を用い、それぞれの語りの中から、集団指導に関する考え方、集団指導を行う際の心情が語られている部分、その際の心情が分析可能となるように前後の文脈が読み取れる語りを中心に抽出を行った。

### (4) CHARGE症候群について

CHARGE症候群とは、先天性の疾病であり、いくつかの治療の必要な合併症を有する。また、Coloboma of iris (眼：虹彩欠損等) - Heart defects (心臓：心臓病) - Atresia of choanae (鼻腔：後鼻腔閉鎖) - Retarded growth and/or mental development (成長：成長障害、精神発達遅滞) - Genital hypoplasia (性器：生殖器、泌尿器障害) - Ear anomalies and/or hard of hearing (耳介の変形、難聴) という、疾患の特徴である6つの症状の頭文字から名づけられている。成長は、定型発達の子どもたちと比してゆっくりではあるものの、しっかり育ち、コミュニケーションは良好である。

### (5) 「CHARGE夏の集いin神戸」について

CHARGEの会は、CHARGE症候群の子どもを育てる家族と、賛助の医療・教育・福祉関係者により構成されている家族会で、当事者の家族が運営している。日々、病状・治療等さまざまな情報交換を行っている。当会は、毎年1回、開催地を変えながら集いの場を設けており、そこでは、医療関係者、教育関係者等からの報告や最新情報の提供、家族からの子育て・療育・教育等に関する実践報告等が行われている。また、CHARGE症候群に詳しい医師に直接子どもを診察してもらうことが出来、地方の家族に対する医療相談の場にもなっている。

本学学生が参加したCHARGEの会は、20××年7月、12時から17時、場所は、ANAクラウンプラザホテル神戸にて行われた。10階の本会議場では、保護者が集う勉強会が13時から17時まで行われ、本学学生は、9階の保育イベント会場に参加した。

次に、保育イベントのスケジュールについて述

べる。会場内には、学生の他に、現役保育士、特別支援学校の教員、看護師、手話通訳士が保育にあたった。ボランティアは、11時30分に集合し、イベントの準備手伝いを行った。12時30分には、受付が始まり、保護者から子どもを預かり、来場した子どもたちから一緒に遊んだ。13時からは自由遊びとしておもちゃやピョンピョンがえるなどで個別に子どもたちと過ごした。13時45分からは、「バナナくんたいそう」、「名前呼び（あなたのおなまえは）」、「パラバルーン」などの集団活動を実施した。当日の流れは、以下のとおりである（表1）。尚、本研究では、この集団活動の指導を行った学生3名を対象として研究を行った。

表1. CHARGEの会 保育イベントスケジュール

時間	全体の流れ	ボランティアの動き
11:30	ボランティア集合	準備の手伝いをする
12:30	受付	来場した子どもと遊ぶ
13:00	自由遊び	個別に子どもたちと遊ぶ
13:45	運動遊び (バナナくんたいそう・名前呼び・パラバルーン)	集団活動を指導する
14:45	自由遊び	個別に子どもたちと遊ぶ
15:30	運動遊び (バナナくんたいそう・円になって遊ぼう!・パラバルーン)	集団活動を指導する
16:00	自由遊び	個別に子どもたちと遊ぶ
17:00	お迎え・解散	片付けの手伝いをする

### 分析

学生らは事前に練習を重ねていたが、実際には実感を伴わない練習となっていたようである。その1つ目の要因として、子どもの姿が想像し難かったということが挙げられる。それは、今回の対象が障害のある子どもであることが関係していたと思われる。

事前の練習は、何度もやったんですけど、実際に子どもが前にいないので、よくわからないっていうか。ぴんと来てないのがすごく多かったです。(Aさん)

練習するときは子どもがいないから、どうなるかっていうのが、障害のある子やから接し方もよくわからない。チャージっていうのも知らないから。(Cさん)

学生たちは、困難であった理由として、対象が

これまであまり関わった経験のない障害児であることを語っていた。今回は、会の責任者が事前に学生たちに説明を行い、子どもの様子などを伝えてくれており、「だいたい〇歳くらいの発達年齢の子どもが多い」ことを知る機会があった。しかし、学生たちにとっては、そのことは有益な情報ではなく、あくまでも障害名で子どものことを理解しようとしていたと思われる。関わりの困難さは、「障害のある子ども」への理解が乏しいことから生起するものではなく、子どもの発達が捉えられていないことが要因として挙げられるのではないだろうか。

その障害特性を理解することは、子どもに必要な支援を行う上で非常に重要ではあるが、子どもを障害名だけで理解することは出来ない。今後、障害のある/なしではなく、その状態から対象者を理解しようとする姿勢が持てるような指導が必要であろう。

学生たちは当日を迎えるまでに、週に1、2回の練習を重ねており、その期間は1か月近くに及んだ。練習の際のことについてはAさん、Bさんから語りが見られた。

自分たちでやってるときは、みんなわからない<sup>①</sup>ので…先生がいないとうまくいってるのかどうかもわからないっていう感じで。わかりやすく、大きな声でとかゆっくりとか。否定的なことばを言わない・(略)手のかかる子って言わずに、もっと別の言葉で…とかいうのが自分の気持ちの中にあって。(Aさん)

練習の時、はじめはどう動いていいかわからなかった<sup>②</sup>し、自分のことだけだったけど、やってるうちに協力っていうか、そういうのができるようになってきた。主以外の子も声出すとか、みんなが流れを理解してるとかかな。(Bさん)

学生たちが不安を感じるものの背景として、自らの行動を客観的、或いは俯瞰的に視ることへの

困難さがあるようだ。彼らは、2年次に保育所において2週間の保育所実習を行っているものの、どのような流れが適切かどうかを判断する力は付いていないと思われる。それは、保育実習Ⅰでは、実際に自らが部分指導などの保育実践を行うことは少なく、クラスの中で担任保育者が実践を行うのを「見て学ぶ」機会であることが挙げられる。また、「見て学ぶ」という行為は、当事者が「学ばなければならない」という意識を持っていることで初めて学べるものであり、仮に「なんとなくその場にいる」という意識であった場合、そう行っただけの力を備えることには限界があるだろう。保育実習についてはAさんが言及していた。

保育実習では…そこまで考えてなかったです。前でやることへのイメージがほとんどなかった。実習中も、「保育士さんってこういう順序で子どもに声掛けしてるんだ」っていうのは見れてなかった。「あ、こういうことをしてるんや」という感じだけで。(Aさん)

保育実践を読みとるためには、保育者の意図やその場の文脈の理解など、非常に高度な感性が要求される。Aさんの語りからは、言葉かけの順序などによって子どもの反応が変化し、その重要性を理解できていることがうかがえるが、実習時には理解が不十分であったことが考えられる。一方、Bさんは、集団指導に対するイメージがある程度持っていたようであるが、それを他者に伝えることはできなかったようだ。集団指導には「これが正解」というものがなく、その時の場の雰囲気や文脈の中で展開されていく。ある時にはよい展開であったものが、別の機会には同じことをしても上手く拡がらないこともある。Bさんはそのような困難さがあることを感じていたことから、自らの感覚を言語化することができなかった(下線部3)のではないだろうか。

集団の指導っていうのは、実習でなんとなくイメージがありました。どうやっていいかわからないっていう感じはなかったかな。こう

やったらいいんじゃないのかなってというのはあったんだけど、それを伝えるのはできなかった。そこまで自分がわかってないから。(Bさん)

練習を積む中で、模擬ではなく実際の子どもたちを相手に実践的な指導をしてみたいという要望が学生たちから挙がり、普段から学科と懇意にしている知的障害入所施設に協力を依頼した。施設から快諾を得て、当日を迎える10日間ほど前に小・中学生の15名ほどの子どもを対象に、自分たちが立案した指導をする機会を得ることができた。以下は、その時に感じたことについての語りである。

あ～もっと指示をしないとダメだなあと。指示のことをほとんど意識してなかったの。何を何回とか、流れのことだけしか、頭に入れてなかった(4)ので、何をどういうかっていうところを全く考えられてなかった。(Aさん)

実際にやってみることで、学生は流れを追うことしか頭になかった自分の存在(下線部4)に気付いている。そして、実践は、決まり切った流れをただ展開させていくことでは、立ち行かないということを経験したようである。また、そこでは、子どもとのやりとりではなく、自分が指示をするということに重点を置いた語りが見られた。筆者は、学生らとともにこの事前練習に同行したが、活動と活動の合間に短時間ではあるものの、空白の時間があり、そのことで子どもたちの集中が途切れ、他所に行くという様子が見られた。筆者にとっては、それは活動の流れ以外のこと、例えば子どもの気持ちに共感を示したり、子どもとの往還的なやり取りを行うことが必要だと見受けられた。しかし、学生たちは的確な口頭での指示を出すことが重要と認識をしたものと思われる。終了後、筆者は学生たちに子どもの反応を受け取ることの重要性について指導したが、学生らはそのことよりも、まずは自らが実感した感覚で、指導の改善を試みたようである。

当日、集団指導を行った際のことを回顧し、次のような語りが見られた。そこには、こうした方がいいと頭では理解していても、上手く表出できない自らにもどかしさを感じている学生たちの心情がうかがえる。

指示がどう言葉にしたらいいのかっていうのに時間がかかって。そろそろ違うことやらないとな…ってというのは思うんです。でも頭が真っ白っていうかパニックに。(略) こなすので精いっぱい(5)、子どもの表情をみたりというのは全然でした(6)。2回目はちょっと余裕ができました。間違ったときに「あ、もう一回」ってというのが言えて。急に変更になったのは、あれは、でもホントよく変更できたな…と。みんな必死だったから。(Aさん)

当日、やってる時のことは全く記憶にないです(笑)。やらなきゃ、やらなきゃってのしかなくて(7)。(担当した)お名前呼びは、一度『すすく』で見たことがあったので。言葉がかぶらないようにとか。子ども返事したあとになんか言うじゃないですか、それが被らないようにっていうのとか、そういうことしか考えてなかった(8)。(Cさん)

当日やってみて、自分たちが流れも考えてたけど、そこまで考えられてなかった(9)なというのと、急に変更になってどうしようって思った。でも、(急遽の変更も)できてよかったです。(Bさん)

急に変更になったから…できるかなあって思ったけど、みんなできちんと出来たから「すごいなあ」って思いました(Cさん)

それぞれの学生たちは、当日の「こなすのが精一杯」(下線部5)「やらなきゃ、やらなきゃ」(下線部7)という焦燥感を持ちながらも、「子どもの表情をみたりというのは全然」(下線部6)、「そ

ういうことしか考えてなかった」(下線部8)、「そこまで考えてなかった」(下線部9)というように実に冷静に自らの事を客観視し、分析している。これは、自らの行為に対してふり返りができていることの表れであろう。そして、それは「どうすればいいかよく分からなかった」(下線部1、2)と語られた練習時には見られなかった、具体的なふり返りとなっている。実際に集団指導を行うことは、学生にとっては心理的な負担を伴う一面もあることも事実である。しかし、実践は、対象と本気で真剣に向き合わなければできない行為であり、そこから得られた知識や感覚は、失敗をしながら取り組まなければ習得できない類いのものであろう。集団指導に対して、嫌悪感や強い不安感のみを感じ、保育者になることを諦めることのないように、教員は、学生が自らの成長に気づくことができるような指導を行うことが必要であると考えられる。

3名の学生から当日のプログラム変更についての語りが見られた。当日、参加していた特別支援学校教員より、立位での活動内容が困難な子どもがいることから、2回目の指導は座位での活動があった方がいいというアドバイスがあった。学生らも参加の子どもたちの中には疲れを見せるものもいたことから、プログラム変更は必須であると感じたようである。そのような経緯から、1回目と2回目の合間のわずかな時間で、プログラム変更をすることになった。

この出来事は、学生にとって、これまで立案し練習してきたことと全く異なることを行わなければならない大きなハードルであったようだ。しかし、自分たちが事前に計画をしたことを実施することでは経験できなかった、臨機応変な対応を行う機会となったようである。突然の変更であったものの、学生らは短時間の打ち合わせ後、落ち着いた指導を行い始めた。学生らは子どもたちの様子をよく観察しながら、子どもの姿に適した内容を行い、また、その速さや回数を吟味しながら、活動を展開することができた。この場において、学生から子どもに対する一方向的な指導ではな

く、子どもと学生らの間で双方向的なやりとりが生起していたものと思われる。「あらかじめ決まった内容をやる」のではなく、子どもの様子に添って必要な活動を行う重要性を感じられた時、その子どもの見方というものが、1度目とは変化したことが考えられる。今回は、熟達した経験者からのアドバイスを得ての変更であったが、今後、実践を蓄積させていく中で、自らそのことに気づき、子どもと往還的な指導を行えるようになるのではないだろうか。

## まとめ

筆者は、授業や会議のない時は学生たちの練習に同席していた。そこでは、学生たちが事前に考えた活動の流れを忠実に展開しようとしたり、決まった台詞としての言葉掛けを行おうとする姿が確認できた。それは、子どもの姿が想像し難かったという根本的な課題を包含しつつも、保育実践を行う際に必要な柔軟さや、その場で生成するやりとりの中で保育を展開していくという技術の習得に関する困難さがあることが理解出来る。それらは、例えば保育実習で見聞した際には、保育者と子どもの間であまりにも自然に行われていたために、その困難さに気付くことすらできていないことも考えられる。

集団指導は、その集団に適したねらいや目標を立て、それを達成させるために十分に練られた活動の流れの中で展開していくものである。そして、その際に子どもや対象者から出た様々な反応をキャッチし、それに対して臨機応変に対応をしていくことがその醍醐味であろう。ところが、臨機応変な対応を行うという行為を未獲得の者にとって、それは時に非常に困難なものとなる。集団生活である保育の場において、集団活動指導を行う際に、このような臨機応変な対応というものは、いわば専門性の1つといっても過言ではない。

保育実践は「その時」を逃すと、その対応は子どもにとって無意味なものになってしまうことがある。保育士養成校で学ぶ学生たちが、時機を逃さない適切な対応する技術を習得するためには、

まず、このようなボランティア経験などにより実践と触れる機会を持つことが大切であろう。次に、学生自身の「何を学ぶか」ということへの意識を高める必要があると思われる。このことは、保育者を目指す学生の実習事前指導に示唆を与えるものとなるだろう。

## 引用文献

- 荒井迪夫・中西一弘 (2013) 幼児体育指導者の動感認識に関する一考察. 淑徳短期大学研究紀要, 52, 61-70.
- 小島千恵子 (2012) 保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究 - 実習前後の自己意識の自覚の変化を中心に -. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 34, 157-167.
- 二宮祐子. (2010). 教育実践へのナラティブ・アプローチ：克蘭ディニンらの「ナラティブ探究」を手がかりとして. 学校教育学研究論集, 22, 37-52.
- 斉藤葉子・大木みどり (2012) 実習の事前・事後指導に関する研究 (Ⅷ) - 責任実習における導入の問題と課題 その2 -. 羽陽学園短期大学紀要, 9 (2), 195-211.
- 鈴木方子・大岩みちの (2013) 保育者を目指す学生の育ちを願って - 実習における課題とねらいの指導 -. 岡崎女子短期大学研究紀要, 46, 1-7.
- 高月教恵・新藤慶・片山啓子・安達雅彦・三好年江・堀内秀子・逸見晶子・横見みや子 (2007) 実習後の学生の自己課題の動向 - 過去5年の幼稚園教育実習事後指導を通して -. 新見公立短期大学紀要, 28, 133-140.
- 山田秀江 (2012) 幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察 - 責任実習の実践報告から -. 四條畷学園短期大学紀要, 45, 51-61.
- 吉田祥子・田島司 (2010) 保育専攻学生における保育職の適性の認知に関する研究 - 実習の前後にみる保育職の認知の変容について -. 北九州市立大学文学部紀要 (人間関係学科), 17, 61-74.
- 全国保育士養成協議会 (2009) 指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する報告書 I - 調査結果の概要 -. 保育士養成資料集, 50.